

緑のまきば

2019年№52

小金井緑町教会

小金井市緑町四・一六・三三

TEL 042・381・7961

牧師 山畑 謙

『道』

山畑 謙

説教

2019年度の聖句

「主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えてくださる」(詩編 37篇23節)

人生は「道」に譬えられます。

イタリアのフェデリコ・フェリーニという監督が1954年につくった『道』という映画があります。怪力売り物にする旅芸人のザンパノは、実に野蛮な男でした。ある時、ジェルソミーナという多少知恵の足らないけれども純朴な娘を金で手に入れ、道化をさせて働かせ、自分の欲望のはけ口にもします。こんな男にジェルソミーナは愚直につかえ、愛そうとするのでした。

ある時、二人は小さな曲芸一座と一緒に興行することになります。ジェルソミーナはその綱渡り芸人の青年と仲良くなります。青年にからかわれ怒ったザンパノは大騒動を起こし、警察に。その夜、彼女は身の立たない女で、生きているのが嫌になつたと歎くのでした。彼は言います。「こんな小さな石ころでも、役に立つ時があるのさ」。それはジェルソミーナがザンパノのそばにいる意味を教え示してくれた言葉でした。

また二人だけの旅興行へ。しばらくたった旅の途中でザンパノはあの青年とばったりと出会った時、なんと彼を撲殺してしまうのでした。この悲劇を目の当たりにしたジェルソミーナの心は壊れてしまいました。そして、彼女は言うのでした。「あなたから逃げようと思ってた。でも、彼が言ったのよ。あなたと一緒にい

ろって」。しかしザンパノには通じず、彼は、野宿先で眠り込んだジェルソミーナを置き去りにしてしまふのでした。

数年の時が流れ、ザンパノは、あの海辺の町でジェルソミーナがあの青年から教わって好んで歌っていたメロディーを耳にしました。それを歌っていた人に話を聞けば、四、五年前、この町で病死した頭のおかしくなつた娘が、いつもこの曲を聞かせていたとのこと。ザンパノはその夜、酒場で酔って大暴れし、追い出されて一人になった時に呟くのです。

「誰もいなくても平気だ」と。それから海岸をふらつき、砂浜で横になって天を仰いだ時、はたと気づくのです。愚直に自分を愛したジェルソミーナの存在が如何に大きなものであつたか。

この物語に、なぜ『道』というタイトルが付けられたのでしょうか。主人公は人生の道の途上で、人をさんざん傷つけ、強欲に生き、自分より弱い者に力をふるって自己充足しています。しかし、そのバランスが崩れる時がくるのです。そこにあるのは深い孤独でした。引き返しようなない人生の道。後悔と悲しみと痛みに満ちている道。

世の中はみんな、自分の努力で人生の道を切り開くのだと頑張ります。その努力は尊いものですが、ある時、思うようにいかなくなる。必死になつてあがきますが、己の力で何とかしようとするほどドツボにはまる。その時に、ザンパノが天を仰いだように、主イエスの十字架の苦しみを見上げるのです。その苦しみは、私たちが己の力に頼み、結果的に痛みと悲しみが溢れかえる道から、神さまの備えて下さる道に立ち帰り、その上を歩んでいけるようになるための苦しみでした。

そうやって、やっと悔い改めへと導かれます。ただ泣き崩れるしかない者に、復活され、今も生きていたもう主イエス・キリストが、告げて下さいます。「私は道であり、真理であり、命である。」(ヨハネによる福音書14章6節) この出会いによって、足もとに十字架の道があることに目を開かれていくのです。そのことに気づかされる時、そこから先の神さまが備えて下さる一歩一歩は、きつと誰かのそばにいようと一歩一歩となるでしょう。赦された者のちよつと悲しげで、しかし穏やかな微笑みがこぼれている『道』です。その『道』に、「はじめの一歩」を。